

ボランティア養成セミナー

ー踏み出す一歩、あかぎから新しい自分へー

報 告 書

国立赤城青少年交流の家では「ボランティア養成セミナー～踏み出す一歩、あかぎから新しい自分へ～」を平成26年5月24日（土）～25日（日）の日程で実施した。

本事業はボランティアに興味のある高校生・学生・社会人を対象に、年に2回実施される。内容は講義を通して青少年教育の理解や施設の現状をとらえ、実習を通して野外炊事を行ったり、救命救急法の意識や技術を習得したりした。また、ワークショップでは参加者それぞれが抱く「ボランティア」に対するイメージや思いを語り合った。最終日には実際に活動をスタートさせている赤城法人ボランティアが、昨年度までの活動の様子や運営側として携わったときの感想などを参加者に発表した。

【実施：5月24日（土）～25日（日）】

参加者は高校生が24人、学生が7人、社会人が5人の計36人で、男女の内訳は男性が12名、女性が24名であった。

<講義：「青少年教育の理解」・「青少年教育施設の運営と現状」

講師：文教大学 青山 鉄兵>



講義はアイスブレイクを兼ねた簡単なじゃんけんゲームから始まり、終始和やかな雰囲気で行われた。「学校以外で学んだ経験は?」「近ごろの小学生をみて、自分たちのころとは違うなあと思うことは?」という問いが参加者に投げかけられ、個々で考えたことを小グループで共有する時間も設けられた。すると、改めて経験から学んできたことの多さを感じたり、小学生が公園でゲームをしている姿から遊びの質が変わってきていることなどが話し合われたりした。その上で、そうした「体験不足」を補う青少年教育の意義や、自然に体験してきたことを「わざわざ体験させる」ことの難しさなどが講義で話された。

また、ボランティアという視点から子どもとの関わりをとらえた「ナナメの関係」や「成長の循環」という話から、ボランティアとして施設にかかわることは子どもたちにとってだけでなく自分たちにもプラスになるという内容の話に、参加者は真剣に耳を傾けた。

<実習：「野外炊事（ピザ作り）」>



説明はボランティアが
担当しました

調理や食事は班ごとに
デザートも作りました

野外炊事では赤城のプログラムにもなっている「ドラム缶ピザ作り」に挑戦した。作り方の説明や作業の補助はボランティアスタッフが担当して行った。参加者は6班に分かれ、それぞれが協力しながら思い思いのトッピングをしたり、特別注文としてデザートピザにも挑戦したりして、野外炊事を楽しんだ。参加者にとっては味も量も大満足の内容だった。

一緒に申し込んできた同じ学校の友人同士がばらばらになるような班編制をすることで、参加者同士の交流の輪が広がるようにした。最初は緊張気味だった参加者も徐々に打ち解け、ピザが完成することには会話も弾んでいた。

<ワークショップ：「ボランティア活動の意義」>



入浴後は「ボランティア活動の意義」についてワークショップ形式で話し合った。参加者がそれぞれ抱く「ボランティア」に対するイメージや思いを確認し、他者と交流し合うことによって、漠然としていたボランティア像を具体化していった。赤城で法人ボランティアを長年勤めるスタッフが進行役となり、他のスタッフはグループに入って討議に参加した。後半はフリートークの時間も設け、打ち解けた雰囲気の中でボランティアについて熱く語る参加者同士の交流もみられた。参加者のアンケートには「世代を超えた人との交流が持てるよい時間となった」との感想が書かれていた。

<講義・実習：「救命救急法」 講師：大東文化大学 中村 正雄>



活動は講義形式でスタートした。実際の救助活動を行う上で気をつけるべきことを動画やスライドによって確認し、救助者自身が安全を確保しながら人命救助するための基本的な知識を学んだ。講義後は6～7人程度の班を編制し、実技講習として CPR（心肺蘇生法）と AED の使い方を実際に体験した。

過去に救急法を学んだことのある参加者は全体の1割程度であった。そのため、参加者にとっては講義も実技も新鮮な内容であったようで、みな真剣に受講していた。またアンケートには「心肺蘇生方法は知っていても、二次災害といった救助者のリスクまでは考えたことがなかった。」という感想もあり、経験者にとっても学びのある内容であった。

最後に中村先生から「正しい知識や技術があれば高い効果が期待できるが、それがないからといって何もしないよりは、目の前にいる人の役に立ちたいと思って何かをしようとするのが大切です。今ある技術は未熟でも、研修や経験で磨くことができます。これは救急法だけでなく、ボランティア精神にもつながるはずです。」とまとめの言葉があった。

【事業を終えて】

今回は事業の参加者のうち、7割近くが高校生であった。同じ学校からの参加者も多く、学校ごとに固まってしまう傾向も見られたが、プログラムがすすむうちに参加者同士の交流も増えていった。その中で本事業のプログラムに対しての評価はとても高かった。青少年教育にかかわる講義では「新しい視点が持てた」「子どもの体験不足を実感した」などの感想から、現代の青少年教育が抱える課題を感じ取ることができたようだった。野外炊事でも楽しそうに活動している様子や「知らない人とも協力できて、とても楽しかった」といった感想など、ピザ作りを通して親和的な関係を作ることができていた。

今回は野外炊事やワークショップといった個別のプログラムだけでなく、事業全体の進行役となる PD（プログラムディレクター）やすべての活動の下準備をする MD（マネジメントディレクター）もボランティアを活用して事業を運営した。中には参加者と同年代の高校生ボランティアもいて、その実際の姿を見せることが参加者のよいお手本となっていた。事業のふり返りの際に、参加者の前で感想を求めたところ、ボランティア自身も自分の成長を実感し、次のステップを見据えていたように感じた。

担当：企画指導専門職 木暮 敦